

基調講演 演題：「若い世代を取り巻く性的指向・性自認に関する課題

～学校、就活、仕事、親子・友人関係、性別区分～

講師：遠藤 まめた 氏（LGBT ユースのための居場所にじーず 代表）



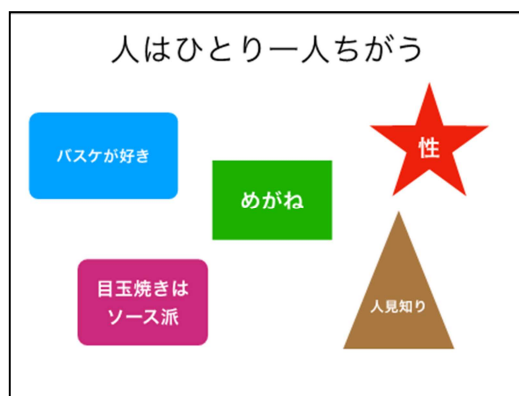
講師紹介

1987年、埼玉県生まれ。トランスジェンダー当事者としての自らの体験をきっかけに、LGBTの子ども・若者支援に関わる。LGBTユースのための居場所にじーず代表。著書に、『先生と親のためのLGBTガイド～もしあなたがカミングアウトされたなら』（合同出版）『ひとりひとりの「性」を大切にする社会へ』（新日本出版社）ほか。

《基調講演の要旨》

バスケットボールが好きな人、卓球が好きな人、スポーツよりも家で漫画を読むことが好きな人、好きには多様性がある。ファッションについても、眼鏡が似合う人、金髪が似合う人、様々なスタイルがある。性格も、人見知りな人、誰とでもすぐに仲良くなれる人、様々。目玉焼きも塩胡椒派、醤油派、ソース派など様々で、目玉焼きに塩胡椒しないのはおかしい、醤油なんて変な人だという人はそんなにいない。

ところが、性に関しては、「これが正しい在り方でそれ以外は間違っている」と感じる人が多い。性に関しては、多様性がまだ認識されていない現状がある。同じ地球上に二人としないように、性にも多様性があるというのが、バスケットボールが好き・卓球が好きと同じ重みの多様性として受け入れられるようになったらいいなと思い、今日はお話したい。



人は自分が知らない誰かの話には興味を持たないが、自分の知っている人や大切な人が苦しんでいるとなると、そのことについて何とかしないと意思行動が変わる。LGBTの人は人口の3～5%でどこの社会にもいるといわれており、20～30人に1人いることになる。皆さんがこれまでの人生で出会った人は何百人、何千人というと思うので、皆さん必ず出会っていて、この話は友達や大切な仲間の話である。知らない誰かの話ではなく、実は友達や大切な仲間の話かもしれないと考えていくことが、この問題に取り組み、考えていく中で大変重要である。

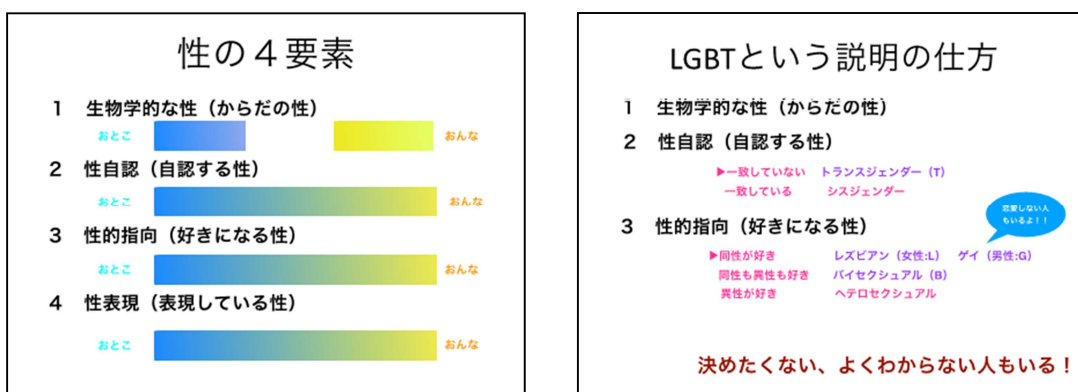
性を構成する4つの要素について説明したい。

まず「生物学的な性」について。生物学的に雄なのか雌なのか、生殖器や性腺、ホルモン等により決まってくる。大きく分けて男性と女性の二つに分けることができるところが特徴。次に「性自認」。自分の性別とは何か、という内なる認識のことで、「100%男だ」「100%女だ」という人だけではないというのがポイント。「自分はどちらとも決めづらい」「80%は男かもしれないけど男だとは言いきれない」等、人によって個人差がある。次に「性的指向」。恋愛や性的関心を持つ対称の性別が何かということ。いついかなるときも男性が好き、あるいは女性が好きという人や、男性も女性も好きという人、基本的には女性が好きだけでもこういうタイプの男性にはドキドキするという人、そもそも恋愛感情があまりない人等、人によって個人差はいろいろである。最後に「性表現」。ある人の表

現しているしぐさ、ふるまい、好きなもの、性格、キャラクターなどが世の中の的に男っぽいといわれるのか、女っぽいといわれるのかということ。これも人によって違う。性的指向は見た目では分からないが、私たちの社会では異性を好きになる人が多いので、何となく「この人は男(女)だから女(男)が好き」と憶測しがちである。

また、「生物学的な性」と「性自認」が一致していない人のことをトランスジェンダーと言うが、誰を好きになるかは全然別の話である。

トランスジェンダーに関する言葉として、「性同一性障害」という言葉がある。トランスジェンダーの人の中で身体を変えたいと思った場合には、性同一性障害という診断を受けた上で治療を受けることができる。よく、トランスジェンダーと性同一性障害が同じだと思っている人がいるが、トランスジェンダーの中で性同一性障害の診断を持っていない人もたくさんおり、持っていなくても、自分の望む性別で学校や社会で生きている人もたくさんいる。



よく、「性はグラデーション」というが、ここから先がマイノリティで、ここまでがマジョリティだ、という明確な区切りや境がない、という意味。LGBTとそうでない人という言い方をすることがあるが、明確な区切りはない。そもそも人間の性のあり方は、100人いたら100通りである。性の多様性を表すシンボルとして、虹の旗(レインボーフラッグ)が使われるが、虹は様々な色があって楽しい、それと同様に人間も様々な人がいるから楽しいんだという意味が込められている。LGBT当事者だけが多様なのではなく、地球上の全ての人が、その虹の一部なのだと思えてほしい。マイノリティの人権を守ることも大切だが、それだけではなく、皆が自分らしく生きていけているのかと考える、自分のことでもであると認識してほしい。

子どもたちは、性の多様性に関する肯定的な情報を以前よりも格段に得やすくなっている。教員も学習する機会が以前に比べて増えつつあり、意識がある教員は知っているが、知らない教員も多い。

高校を卒業するまでに誰にカミングアウトしたかという調査では、カミングアウト経験を持つ回答者の72%が同級生を選んでおり、親や担任等の大人にカミングアウトする子は少数。よく、教員からカミングアウトされたらどうしたらよいか質問を受けることがあるが、カミングアウトはほとんどの場合は友達にしている。それは、大人が信用されていないからではなく、10代の子どもたちは、自分の性に関する話は同年代にする傾向があるようだ。子どものキーパーソンは子どもで、子どもたちの中でカミングアウトは起きており、その際に子ども同士でうまく支えることができるかが大事である。

今の学校の状況は、性の多様性が前提になっていない場面が多い。例えば異性愛を前提とした教科書やカリキュラムでは、自分たちの将来を考える場面で、異性愛でシスジェンダーの人たちが大人になるイメージしか持つことができない。

学校の仕組みもシスジェンダーが前提になっている。制服やトイレ、更衣室等の問題である。勇気を出してカミングアウトしないと個別の対応が受けられなかったり、勇気を出して話しても、我慢しなさい、と言われてたりもする。子どもたちは、自分がマイノリティかもしれないと気付いたときに、周りに自分と同様の友達や大人はいないと感じてしまう。本当は多様性というものがあったとしても、それは見えなくなっており、自分だけが違う存在で、自分は大丈夫だろうかと非常に不安になる。加えて、特にトランスジェンダーの子で、男（女）らしくない仕草を理由としていじめやからかわれている子がいると、LGBTの子は学校が安全な場所だとは思えなくなる。

多様性があることが前提となっていて、「異性が好きな人ばかりではなく同性が好きな人もいる」「男（女）はこうしなければならないではなく、"いろいろだよな"という前提が元々あり、肯定的で尊重された言い方で会話に出てくる・・・そうすると「ここなら安全かも」と感じることができる。性の多様性があることを前提にし、肯定的な人間を増やす。そのためには、二つの登場人物が必要と言われている。一つ目の登場人物は「当事者」。自分の姿を表に出して、自分の物語を語る当事者が出てくると差別がなくなっていくと言われている。二つ目の登場人物は、「これまでと違うリアクションができる周りの人」。周りの人が肯定的に自分の考えを話せるようになると世の中は変わってくる。また、何も無いところからいきなり会話は生まれないので、学校や病院の待合室などの人目につくところにLGBTや性の多様性に関するチラシ・ポスターを置いて肯定的な会話が生まれやすくするのは良い方法だと思う。

多様性が前提でないルールが作られているので、これまでのやり方を見直すことは非常に重要である。これまでは性別欄のある履歴書が普通だったが、性別欄がない履歴書が発売された。性別欄については、まずは業務上尋ねる必要があるかどうかを考えてほしい。最近では、高校の入試願書や自治体の職員採用試験の申込書でも性別欄を削除しているところが増えてきた。また、配慮が進んだものでは、選挙の投票所の入場券があり、「男」「女」ではなく「1番」「2番」と記載方法を変えてやっている自治体も増えている。ほかにも、性別欄を二択必須でない聞き方をする場合も増えているので、是非検討してほしい。

多様性を大事にするとは、まず性のあり方は一人ひとり違うということ。それはLGBTの人が皆違うということではなく、全員が違うということ。100人いれば100通りの生き方があって、それぞれ自分が大切にしたいことや大事にしたい自分らしさがあり、それを尊重していくことが大事である。また、生きた情報に触れることができる世の中になっているため、その情報を収集するためのアンテナを張り、自分の考え方をブラッシュアップしてほしい。

自分がLGBTであることを打ち明けることをカミングアウトと言うが、子どもは大人にはなかなか打ち明けられないので、日頃から子どもたちと接するときは、性の多様性について肯定的な話がしやすい環境を作ることが大切。その上で、もしカミングアウトされる機会があれば、本人は自分を信頼してカミングアウトしてくれたのであって、他の人に伝えてはいけないことを認識してほしい。ひとりではどうしても抱えきれないと思ったら、電話相談等守秘義務がある所に相談してほしい。

子どもと接する時だけでなく、勝手に性別で決めつけた話し方になっていないか自分の言動について考えてみてほしい。また、変えられる制度があれば変えたり、それぞれのやり方で性の多様性について話すきっかけをどう作れるか考えてもらえればと思う。

基調講演 演題：「中高年を取り巻く性的指向・性自認に関する課題

～医療、介護、同性ふたり暮らし、ひとり暮らし～

講師：永易 至文 氏 (NPO 法人パープル・ハンズ 事務局長)



講師紹介

1966年、愛媛県生まれ。1980年代末からゲイのコミュニティ活動にかかわる。出版社勤務をへて、2000年代以後、ライター／編集者として性的マイノリティの暮らしや老後、HIV問題を取材・執筆。高邁な理想論を追うよりも、いまできることを具体的に、が持ち味。2013年に東中野さくら行政書士事務所開設。同年、特定非営利活動法人パープル・ハンズ設立、同事務局長。著書に、『ふたりに安心して最後まで暮らすための本』『にじ色ライフプランニング入門』ほか。

《基調講演の要旨》

人は、「男か女か」「シスジェンダーかトランスジェンダーか」「ヘテロセクシュアルかホモセクシュアルか」と割り切れるほど分かりやすいものではなく、その中間であるとか、両方が微妙に交じり合っているとか、人生の途中でだんだん変化したとか、さまざまな場合がある。

人は無数の状態の組合せの結果であって、一人ひとりに個別のセクシュアリティがある。性的マイノリティを理解しましょう、アライ（理解者）になりましょう、と上から目線で語るのではなく、私は、まずは一人ひとりが自分の固有の性のあり方を見つめて、尊重することが大切であると思っている。自分のことを尊重できない人は他人のことも尊重できないのだから。

日本では、同性愛について宗教的なタブーや刑罰はないが、いまもテレビを含めてホモネタと言われるものが日常茶飯事であり、それに対して笑いで返すのが約束であり、子どもたちもいつしかそれを学習する。そんな侮蔑的な雰囲気の中かで性的マイノリティたちは、自分は当事者であると表明することはできない。日本は、そういった世間体と同調圧力が強い社会である。世間体と同調圧力の根幹は、社会には男と女しかいないという男女二元論と、男は女を、女は男を愛するのが正常で、それ以外はアブノーマルだという異性愛主義だ。こうした固定的な考え方が世間体や人並みといった仮面をかぶって、私たちの前に立ちはだかっているのではない。

世間体と同調圧力の現場である暮らしや地域社会について考えてみたい。性的マイノリティたちは、同性二人で暮らしている場合や、同居していなくても同性パートナーがいるという場合がある。高齢で一人暮らしをしている人もいる。また、ゲイの中にはHIV陽性である人も一定数いる。トランスジェンダーなど、人生の途中で違う性別で生きることにした人もいる。社会の圧力の中でメンタルヘルスを悪くし、うまく働けない、あるいは職場の理解が得られず転職や非正規雇用を続けて十分な経済力がない方もいる。また、セクシュアリティが原因で、親族と疎遠、親族と関係が悪い、支えになってくれる友人やそういった人間関係が乏しいといった場合もある。

暮らしのなかの課題では、例えば病院で同性パートナーは家族でないからという理由で面会を拒否されたり、医者から病状を説明してもらえない、最期にも立ち会えない、ということが今でもある。どちらかが介護が必要になった時や認知症になった時に、もう一方が介護にあたる、あるいはその人の貯金を下ろして老人ホームに入れてあげることができるのか。亡くなった時に、突然親族が現れて、マンションや貯金をすべて持っていったというのは、同性カップルではよくある話である。また、ひとり暮らしの問題は地域行政の課題でもあり、今では相談窓口もあろうが、セクシュアリティがネッ

クとなって相談にいけない場合もある。

トランスジェンダーの人たちの医療の受けづらさはよく言われている。医者からどのような言葉を言われるのか、また医療の現場は性別確認が多いため敬遠して、具合が悪くても医者へ行くことをためらってしまう。そして、同性カップルと同様に、立会いや病状説明が親族限定で排除されてしまうパートナーもいる。

そういった場面では、パートナーシップ制度がある場合は証明できるが、ない場合は、パートナーが自分を医療のキーパーソンに指定して代理権を与え、意識不明時もそれを示してもらえよう、書面にしておくこと、外で倒れた際にも連絡がもらえるよう、緊急連絡先カードを携帯しておくことを私は呼びかけている。本人の自己決定（意思）が確認できれば、それを病院が拒むいわれはない。

相続についても、同性カップルは、遺言を残したり、昔であれば養子縁組をする手段がとられている。ただ、だれでも気軽に遺言書を書けるかというと、そうではない。これは、役所に婚姻届1枚を提出すれば済む法律婚と同性カップルとの違いである。当事者に少しでも知恵を付けてもらうために、すぐにできることを本やネットで紹介しているので参考にしてほしい。



若い時からの問題というと、住宅がある。同性同士や、見た目と本人確認書類の性別が違うトランスジェンダーの人が住宅を借りづらいということは、今もある。住宅を求めている人には、いろいろな背景の人がいるということ、大家さんや不動産業者の方は理解を深めてほしい。確かに賃貸借は契約自由の原則であるが、生活インフラ提供者としては社会的な責務があるはずだ。不動産事業に携わる人は、性的マイノリティをはじめとした社会的課題（ほかにも外国人や障害者、高齢単身者など）について積極的に認識を広げていってほしい。

“地域社会”としていまもイメージされることが多い国民的アニメ「サザエさん」の世界は、男たちがみな会社へ働きに出かけ、女たちはみな専業主婦である。子どもも含めて男の収入に依存して暮らし、女たちが経済力を持たない世界である。日本人配達員しかいない三河屋さん、日本人のために家を探す花沢不動産。見事に性別役割分業と異性愛、そして日本人だけという、自分と同質の人々だけで貴かれている世界だ。しかし、これが私たちの地域というものの原風景、発想パターンになっていないだろうか。

現実の地域では外国人やさまざまな家族形態が増えている。いや、それが顕在化して見えるようになってきた。同性カップルの家庭も増えたのではなく、顕在化してきたにすぎない。そして、良きものとして語られる家族の中には、DVや虐待、依存症、貧困等、さまざまな課題がある。地域の価値観を振り返ってみると、「なぜ結婚しないのか」とか、結婚相手は異性の人だという思い込み、「旦那さん」「奥さん」という呼び方等、一方的な価値観で判断されている。また、避難所の運営等で「男の人（女の人）これやってください」と性別で分ける言い方もどこまで妥当性があるのか、少し頭の片隅で考えてみてはどうだろう。こういう発言の背景には、性別二元論、異性愛主義、同性愛嫌悪があるのではないかと。それが正に世間体の圧力として、性的マイノリティのみならず、すべての人を固定的な考えに縛り付け、息苦しくさせているのではないだろうか。

ジョン・ロールズという倫理学者は、いま目をつぶって再び目を開けたときに、地球上のだれかと

入れ替わっているゲームを考えた場合、自分が入れ替わった先で自分的には最悪だと思う立場になってしまうような世界は果たして正義だろうか、と問いかける。目を開けたら自分に同性パートナーがいる、あるいはパッと目を開けたら自分の体に起因する性別にとっても違和感がある、そういう人間になっているとき、今この社会は善なる社会と言えるだろうか。もしそうでないのなら、この社会をどう変えていくのがよいのか。自分の周りの、自分の家庭の、自分の職場の不正義を少しでもなくすにはどう変えればよいのか、それを一緒に考えてほしい。

LGBTを理解してください、理解をもって優しくしてください、という「気くばりのすすめ」を言いたいのではない。性別と異性愛主義に縛られたこの社会を少し緩めてみてはどうだろう。それは性的マイノリティだけでなく、多数派であるあなた自身をもラクにするのではないだろうか。すでに起こっているいろいろな社会の変化に、アンテナを立ててみてほしい。その前提として、“性”は恥ずかしくない、皆が当事者なんだよ、ということも、付け加えたい。

人間だれでもワケありであり、自慢したいところがあれば、隠したいところもある。そういう当たり前のワケありの人間が、一緒に暮らしているのが地域社会である。そんな多様な背景を当たり前の前提としながら、たがいに受け入れあい認め合って暮らしていこう。そのとき、性別やジェンダーの視点も広げていけたらいいなと思う。